

辻善之助博士と眞宗

藤 島 達 朗

一

すぐる年東本願寺の坂東本教行信證の修理が完成し、その報告法要が執行せられたあとの席のことである。参列の禿氏祐祥博士が、内懐から一通の文書を取り出していわれるに

「この坂東本を最も心にかけて、且つ國寶指定を最もこいねがい、そして最後まで、その實現につとめられたのは辻博士である。前年その指定をみ、それによつてここに國家の手による完全な修理の完成をつげたについては、博士の喜びはさることながら、宗門の末流として、博士に對し萬腔の感謝をささげねばならぬ。ついでには事の次第を一筆しておいたから、願わくはその函中に同納して後世に傳えられたい」と。

座は一瞬肅然として老博士の前に頭をたれたことであつた。

辻博士はそれより數ヶ月後の晩秋十月十三日逝去せられた。博士のそのはなばなしの學績は、いうまでもなく單に眞宗一宗にかぎるものでなく日本佛教を含む國史全體の上にあるのであるが、今は眞宗にかぎつてその一端をのべ、以て宗史にたずさわる末徒の謝念と弔意にかえたいと思う。

二

博士は明治十年四月十五日、姫路市元鹽町に生れられた。先考は名は善次郎、博士の筆によると生涯「他力の教を篤信し、常に念佛の聲を斷なかつた」方であるといふ。博士が桑門の出にあらずして早く大學に於て日本佛

教史の究明に志し、終世それを主とせられたのは、多くこの家門の風致によるのであろう。今日でこそ國史に志すもので佛敎史的關心のないものはない状態であるが、明治三十年代の帝國大學の講壇は、排佛のころをひめた水戸史學流のろうだんする所で、その道は必ずしも平かならざるものがあつたに相違ないのである。明治卅二年大學卒業について入學された大學院の研究題目は「政治の方面より觀察したる日本佛敎史」で、やがて同卅七年その完成をみ、同四十二年には同論によつて文學博士の學位を得られた。時に博士は卅三歳であつた。

博士の眞宗史に於ける劃期的な行績の一は、親鸞聖人の筆蹟の研究である。もともと明治の中頃から大正の初年にかけて、國史學界の一部に抹殺論が流行し(重野博士のや辨慶に關す兒島高德論の説の如き)、親鸞聖人の存在についても兎角の議論があつた。これについて博士は、筆蹟の確定がそれを決するとなし、大正八年自ら西本願寺に出張して精査の結果先ず「淨土論註」奥書を確實なる眞蹟の基本と決定し、これに基き「六字名號」「安城御影銘」「教行信證」の三點を正當となした。續いて翌九年更に三重縣一身田の專修寺に赴いて探求し、遂に三十五部の眞蹟を得、これらによつて坂東本教行信證以下十數部のそれを確認し、

總計五十五點を公表されたのである。

當時これら所藏の諸寺の門戸はかたくて一般に開かれず、博士の地位とその眼識を以てしてのみよくなし得るところであつた。その結果は同九年の史學會並に帝國學士院にて發表されたが、やがて(同年)「親鸞聖人筆跡之研究」(東京金港堂刊)となつて公刑せらるるに至り、親鸞聖人の地位は全く定まり、以後の親鸞學研究の基礎となつたのである。

即ち同書に(78 p)

「教行信證にしても坂東本、本願寺本、專修寺本と三本合せて比較研究の出来るように全部寫眞版にでもして公にせられたらば學界の利益少からぬことであろうと思ひます」

といつていられるが、大正十二年、東西兩本願寺が立教開宗記念として、それぞれ坂東本、西本願寺本の影印本を出版したのは、この提言に應えたものであろうし、教行信證の研究が事實この出版によつて飛躍的に盛んになつたことは周知の如くである。

三

博士の眞宗に關する述作には、又昭和五年中外出版社

から刊行された「本願寺論」がある。これは元來「中外日報」紙に連載されたものの成書で、四六判一二六頁、必ずしも大著ではないが、當時とかく動搖する宗門に對する警告の意を寓せられたものであつた。併しあくまで冷厳な史筆で、今日なお行わるべき正確なる眞宗史通論である。ただ附録的に最後に加えられた「本願寺の罪過」三のうち、貴族化、形式化はさることながら、一向一揆をあげていられるところに、時代の轉移を感ぜしめる。

この外關係の論文に至てはまことに多い。一々あげるわけにゆかぬが、總じてその所論ばあくまで冷徹な學的筆致にして、なおかつ脈々たる溫情と好意を看取せしめるものである。

四

博士の庇護による宗門關係の史學者は、これを先きにして藤原猶雪博士があり、近く谷下一夢氏がある。一世を驚かした中澤見明氏の「史上の親鸞」も、實は博士の推挽によつて世に出たものであり、氏への寄意は殊に深かつたという。更に、最近東大系の俊逸なる史學者が多く眞宗史の諸問題を取扱い、はなばなしい成果をあげて斯學の面目を一新せしめつつある。博士の種苗正にここに華開くというべきであらう。

筆をおこうとして、二十數年前、本學講堂に於いてえん、えん、三時間「日本文化と佛教」を講ぜられた時の——それは歴史を學びそめた若い學徒達を感激、深く期せしめたものであつたが——博士の重厚な溫容を思いおこす。一重に御冥福を祈る次第である。